成形圖說

五穀部

十九

清印

農商務省

圖書

第

號

共

冊〇

太政官文庫

和書門

八三四二 類號

函

三〇 冊

架

内閣文庫

和書

八三四二 類號

三〇冊

一九六函

一九 架

内閣文庫

番號	和	8342
冊數	30	(19)
函號	196	98

国立公文書館
National Archives of Japan

成形圖說卷之十九

目錄

粟（アハ）

黍（キビ）

蜀黍（タカキビ）

玉蜀黍（トウモロコシ）

成形圖說卷之十九

東京帝國大學圖書之印

明治十一年購求

成形圖說卷之十九

五穀部 粟類

阿波 古事記

阿波乃宇留志禰 本艸和名粟米芑粟注云粱之莖白者按之是等即平常の粟ゐ〳〵て俗云 小粟 大和本艸

粟 別錄○粟の古文七字並ゑ字典ゑ載ゑり

○韻會小補粟為陸種之首米之有甲者

引食經粱米一名芑粟一名穄米○本艸時珍云周禮九穀六穀之名有粱無粟可知矣自漢以後始以大而毛長者為粱細而毛短者為粟今則通呼為粟而粱之名隱矣是西土のいふ〳〵阿波と粱とゝいひ後ゑ粟とゝ呼ひ為粟必毛の長短ゑ因さはつし漢以前ゑ粟てふ者ハ穀實乃惣称耳故ゑ論孟等の粟てふ者ヒ今の阿波とゝなりけりと江談抄ゑと近世以粟為粱とゝあれハ吾邦のむかしと粟とゝとゝ乃おゝゝし

粱 周禮○和名鈔

阿波ゑハ粱の字用しゝり和

名抄引唐韻粟禾子也ちゝ阿波ちゝハくくしから
らに禾子とかけていつはうらぬ
よし本居氏もいつりの今按西土は大むね陸種のみ
てゝよりも山東の地ハ稲田ふしといつりさらハむりし
ハ粟といへの米といつるゞ出ちく
穀羣芳譜粟米之
穀の惣稱より係りをかゝがとゝ
中之一粟屬也北方直名之曰穀脫殼則為粟米亦曰小米
又直省志書云道化州粟早熟晚熟土人總名曰穀○天工
開物云粱粟種類名稱之多視黍稷猶甚其命名或因姓氏
山水或以形似時令摠之不可枚擧山東人唯以穀子呼之
併不知粱粟之名也ちゝ
黄米 天工開物凡粟與粱統名黄米
粱 爾雅註今江東人呼粟為粱
郷萁 禮記
秫粟 孟詵水艸大抵粘者為秫不粘者為粟故呼此為秫粟以別秫而配秫粟ハ即ち粟あゝ糯粟ゝ別て秫の名と付ゝも
飯穀
粱穀米 以上風京通志
蕃名ギイルスト
黄粟 葉驛

濱照

黄粱米 別錄○按ニ考工記ニ丹秋註ニ丹秋赤粟也即黄粟ものなるし

蕃名

白粟 本艸和名○俗言白粟ともくの波也 猴粟 訓蒙圖彙芭粟ものり 吳志奴粟

白粱米 和名鈔引ニ食經ヲ白粱米一名圓米按ニ爾雅ニ芑ヒ白苗ハ今之白粱粟ト即此もの耳

蕃名

阿波乃與禰 本艸和名 青粟 檳粟

青粱米 本艸和名引ニ陶景注ニ粱米皆是粟類也

蕃名

保食神の顱上ニ粟の生ルとぞ高御産巣日の靈ヨ宣しきに天にもろ乃葉ヨ乎根神の屋ニもろしもうら

せは書日の野生に粟まかはし或又阿波ゝハ味の淡
よゆゑなよし書紀ゝ注せるりゐと阿波國安房郡あと
いひしゝと始は粟てゝ之ゝ穀ゝ之ゝ伊賀風土記阿孟郡始蠶伊勢國云阿波
莊天照大神下天之阿波子給五穀長養故名阿波謂阿孟者音謬也又粟は大穂の謂ゝも
ゝゝ之ゝ粟ゝ之ゝて穂房乃大ゝと西乃州ゝて
島阿波ゝ粟ゝ直省志書ゝ山陰縣粟苗如蘆高丈餘粒大如雞豆俗曰遇粟穄粟是島粟の種ゝ
しるゝ一説ゝ房粗く毛密く穂乃長く大ゝと粟ゝし粒
ゝく房密して堅剛ゝと粟ゝゝゝよしいつの時ゝ
式ゝと粱粟せゝ阿波ゝ粟ゝ
て世ゝ通名ゝゝる和漢ゝ流ゝれゝ必ゝ大小

ゝ別へきゝはいゝゝゝゝゝ説文ゝ粱ハ稲穀名ゝゝ
釋名れいゝ爾雅ゝ糜ハ赤粱粟ゝ
きゝゝざゝあんゝゝゝハ説ゝ粱ゝ
てわゝらはゝゝおゝとまてつゝゝゝに雜ゝゝハゝ
ゝゝわゝざゝれハゝゝゝいま○稲麦ハ穂ゝの一粒ゝ
苙を出て苙ゝて一穂ゝ生し黍は一粒ゝ一苙ゝし
數枝ゝ出し枝ゝ穂ゝ生て唯粟は一粒ゝ一苙成ゝし
一穂ゝ地ゝゝれゝ天生の殊ゝゝ古ゝ
変ゝゝゝゝゝゝ我彼ゝ素生乃おのゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ伊勢風土記粟名郡粟田在市部之
北土民植五穀而難熟但粟而已大熟故名焉○粟ゝ春物
夏物乃両種ゝ秋粟ゝ秫粟の二品ゝ又苙ゝ低美

赤ゟ穂の大小長短色の黄白青赤黒所ゟ地里の方言ゟ
因ル早晩乃種類ゟ結ひて名状百品ゟ及ふ○春ゟの
栗と種ハ桃花始て開と上時とし四月と中時とし五月
とゟ時ゟ早栗ハ六月末七月始ゟ熟く早栗ハ字鏡ゟ
和世阿和といふあり阿和の和ハいしへ彼と通し用ゐと東雅ゟいつり○夏と
の栗と種ハ初伏と上時とゟて土用中迄ハ前へし有
乃なハうゑくと雨ゟ遅ゆゑ結る色うゝ○栗とゝく
除地ハ三四十日前ゟ深く耕し前時ゟ浅く犂とゟ
種子と桶ゟ入て人馬牛乃糞灰油滓の類と壌と掾合肥
ゟ容て前日し前うゟ上とゟ足ゟて清五面し農業全書ゟ春うゟ

しハ少し端ゞし夏ハふまとしてと切ゟ生るとゝふハ
深ゟ夏ハ端ゞと夏し端ゞされハ蟻喪種子と穴ゟ引入
それゆゑとふし故ゟ二三度と蒔面し○一法ゟ梅雨の中茅とゟ鍬ゟて
二三通犂と面し初伏ゟなて又犂て馬把乃類ゟく草
ゟとゟと掩攤つ生後一人鍬とんがんぎ紙切ゟれハ後
ゟり一人壌みゟ合せし種子ハ前ゟり○又春夏乃間
原野乃茅ゟ伐焼鍬ゟて粗く削て或ハ土用前ゟ茅ゟと
伐土用ゟゟて即火と和焼物火ゟる中ゟ雪茅の子と
まじつ漫撒してゟ入ゟらへ踏ひおろゟせされゟも
孔実ゟり是ゟ心人の一法ゟ蓋栗ハ性日當と喜て高
燥ゟ宜しゟゟ火種して生長ゟり既ゟ長て六月ゟ遇と

いへども多き傷あし周禮訂義云粟耐乾雖歲之旱不
至太失云々○凡粟と時は一段よ種五六合ある色し瘠
土ハ多く蒔なり又粟と稙よハ日午より未時までの交
るる色し且と父まさを色うく次農の常言よ蜘の色仰て
粟種ぞとハ晩景に及色ク〳〵ざるはいつの大雨乃後或
ハ雨中に蒔ハ〳〵皆所〳〵雨後ある〳〵は二三日とし土乾
てようう〳〵るつまて日和と候ハ稙下せし粟は三日ふ
〳〵馬耳の〳〵〳〵生長を色苗二三寸の時ちゆて粟
と叶ハ〳〵一遍蒔く習引ハり又七八寸よ及ふ時一遍皆
引ハ後所〳〵苗ハ又一遍方引ふりてを蒔の出入い

とて苗と洗ハ色し粟ハ〳〵ハ〳〵を畦はゞ廣く苗稀く引
ふるとと習〳〵やう○糞ハ肉うとも新くはよきとつゝ
ハ稈腐とハ糞と節〳〵に生し遇稈よ成てと実のりあし
肥養ハ地道よりより好惡所色異なハ糠とつゝい上方
ハ弱とよしとそるうとし凡肥養よ人糞のそるし
大糞水糞乾鰮油滓稈糠馬牛の屎尿魚鳥の骨肉等海藻
草の類よ色ゆて生地の燥濕別粟よ適い其土の黒白
黄青或ハ沙石の相まゝはるよ性の宜と色の分色あ色
老農よ咨稟つし○粟ハ熟して遲く刈とよしと色刈
よ土〳〵ハ〳〵ハ力ちくきよ〳〵て熟とちゞりそ〳〵て藁莖

よ難き烈日に暴さと三四日許し連枷にて打脱てつし或ハ臼にて舂箕にて簸或ハ篩籠にてふるひし苞とあて儲蓄つし粟ハ稲米と変ひ数十年を歴といへとも蟲蝕乃憂なく飢饉と救ひ軍實と峙豆ふるものあし豆稲よ亞ての嘉穀なり但生飯よりてハ他物をまゝへはもつとも可ならざる事○公事根源曰京極まて粟の御飯と献ぜ蘇民将來の由者とかや此所よ少将井とつゝハ稲田姫と祀るとそ

糯粟延喜式

秫月令○時珍云謂秫為黍之黏者悞也　衆

粘粟以上爾雅　糯秫　糯粟以上

唐本州目 黄糯細 粘穀 小黄米以上盛京通志

蕃名クークギールスト

糯米も亦其色黄黑赤白等の種類ありて中にも赦十種乃品ありて其色を分て黑糯粟黄糯粟青糯粟などゝ呼別て但し種穫の法ハ粱粟と同しく粢餅を作るハ糯米と変ることなし○粟盛酒ハ即焼酎にして焼酒火酒などゝ乃今の焼酎ハ南島粟盛より出るゝ粟を醸し造て釜飯して煎ずて氣の熱上り醸沈し酒ちゝしハ粟沈と称ふ盛の字ハ俗しるて一説に立て笠ハ泡ぶくゝ名付とも云ふもの吾南島乃精製風土の自然に成て天下無比乃醸

酒也その故ハ畠田少く粟のこゝ多く作るより
是を性埴地乃日當と為ぶゝのみして凡南島の粟ハ蜀
黍よりひゝく穂乃長二尺程みして稗ゝの時ハ正月庶
作ゆ雪より種を蒔し苗三四寸の頃雨中に振揺盡水に浸
し二三度げゝ移植ふうゝるゝかゝ分大穂の粟とて
造る酒ゝれハ其滿氣ゝまゝ稲よりて醸せるゝ芳ら
げる芳烈と得でかし又後ゝハ稲米まてと造事天工
開物に粘粟可為酒とゝるも燒酎の類ゝるべし
粟穂新撰字鏡　粟穰同上
穂ゝ八頭蓬蘂猿ゝ長穂ゝゝの目数十種皆ゝの形似ゝ
象る凡粟の頭莖と稭ゝゝ稭也く出ねハ水年ゝハ頭
ゝ短ゝゆゆ　宋書云文帝時醴湖生嘉粟一莖九穂　○粟穰ハ田舍の上屋と葺
霜雪の霑ゝゝ又書紀に少彦名命至淡路而緣粟莖則彈
渡而往常世鄉矣ゝゝ命測ゝる斯所みして天下造成の
大功ゝ以て已の力ゝゝゝゝゝ清淨く念慮ゝ打晴し去
就の道ゝ明ゝゆ彦の場ゝ帰ゝゝ語嗣し所ゝゝ

伎備舊事紀○是黍
稷乃統名ゝゆ
伎備乃毛知和名鈔○黍は黏ゝて用ゝ米の稃と主と
粘黍粘粟統名曰秫○古今注云　糯黍本朝食鑑　眞黍
稲之粘者曰秫黍之粘者為黍　天工開物云凡

黍

黍本艸○說文以大暑而種故謂之黍時珍云稷之黏者為黍

禦合禮記稻穊字典蜀人謂黍曰稻穊

蕃名ソルグサート

赤黍和名鈔○本朝食鑑曰糯黍者狀與稻黍同而粒大色赤而粘作餅及團子而食味美為上膳曰赤黍ふり

丹黍 赤黍 黃黍以上和名鈔引本艸○盧目氾勝之引詩云維糜維芑糜即䵃音門爾雅○綱通雅丹黍謂之糜音門今河西人音糜䵃音轉也○

赤苗䵃說文赤苗也○綱目吳瑞云浙人呼為紅蓮米江南多白黍間有紅者呼為赤蝦米

蕃名

黑黍和名鈔○本朝食鑑曰有黑黍者是糯黍之黑色者也

秬秠爾雅秬黑黍注詩云維秬維秠維穈毗秠亦黑黍又秠一稃二米此亦黑黍但中米黃耳秠稃古今語之異○通雅云本艸又名糜子大雅秬秠穈芑皆黍屬以色別之按此說穩也○綱目李巡云秬是黑黍中一稃有二米者古之

定律者粒並均勻無大小然と天工開物云凡黍粒大小
總視土地肥磽時令害育宋儒拘定以某方黍定律未是也

黒黍 和名鈔引本艸○淵鑑類函漢和
帝時任城生黒黍或三四實也

蕃名

伎備ハ黄實の義なり和名鈔ハ赤黍黒黍等の名を
表て単ニ黍と指ものなえど而赤黒の中ニ糯粳の種あ
ル蓋黍ハ統名みて稷麦と云ヨ大小の別ありるかし
今世例ニ倣ふ本朝食鑑曰黍多種類　本邦所用不過
四五種稲黍者所用少而味亦不佳農間作飯粥而食其狀
似粟而低小有毛結實成枝而殊散其粒如粟而光滑色黄
白三四月下種五六月可收七八月收者亦有其長而短者

名小黍亦稲黍類味不佳又有爪黒黍者此亦稲黍之糯也
舊事紀ニ保食の於胸生黍粟とあるは豆ニ陸種
ふ〻て皆高燥の地ニ宜しきもの　胸いふ〻ハ高坂と称てやふ〻ハ高嶺
ニ宜しきを示さしむるなり黍粟の高仰ニ今の印本ハ以粟稗為陸種
とのことなりて黍稗ハ五ニ漏しの又黍と書紀と古
事記ニハ生始生よしあるさればいろハ世ハ但黍
ハ粟ニ属しるるしし然ニ物ニたるてハ此ものを穀乃
ものとして禮書ニ食先黍稷而飯稲粱ととは祭祀
の祠具ニなるいふとも　皇國ハそとをもりとき
しかるなしこれ種はしともりより多ゆえて今

乃倭の前中後ハ黍の國と號し中ゝ國也ハ遍ク種乃
冥ゝきゝ不ゝるよしいつゝ近ゝゝを備前玉人ゝ詢に
ゝゝまゝて粟ゝゝもけゝゝものゝちゝ他ゝゝゝ法ゝき○
山ゝものハ形粟ゝ似て枯ゝる法ゝゝおれし出られど黍ハ
白茅ゝかゝゝゝ刈ハ硬して粟穰乃ゝゝく秣ゝゝは
色がゝゝ干ゝゝゝと稍ゝ尺ばゝゝは根ゝゝ夏六月頃
ゝゝゝゝゝゝゝに衆穀ゝゝ早く熟ゝゝゆゝゝ倭の國人
ハ早晩ゝ呼ゝゝよしいつゝゝゝゝのゝゝゝゝ乃ゝ穀て稻
の高ゝし實ハ固く暢やゝに穎垂ゝのゝゝ氾勝之書云黍者先夏至
三十日此時有雨强沖繩ゝ赤九粟ゝて粒赤くゝ熟ゝゝ
土可種黍畝三升

常乃粟ゝゝゝ一月頃ゝゝ出ゝゝ抜ゝ是ゝ赤丹黍の
準ゝゝゝて餐餅ゝ作ゝゝ熙朝樂事云正月元旦夙興盥嗽啖黍餻曰年々餻家長少畢拜姻友
投箋互拜曰拜年也又酒ゝ燒酎ゝ造ゝ香濃く味醇し
万葉集にいかしへの人ハ飲やるまゝの酒醒ゝぐすゝ
か貫黍粉ゝゝ是黍の酒也一流ゝ吉備の後世伊氣山の
醞名物ゝて庭訓往來に謂備後酒ゝゝ蓋吉備國ハ黍
ゝ宜きの地昔ハ黍穠ゝて造ゝゝの酒醴ゝゝゝゝゝゝゝべ
し說文孔子云黍可以為酒爾雅翼云黍字从禾入水三合
之字ゝゝ周禮鬯人釀秬為酒書洛誥秬鬯香酒也西土は

舊より黍を以て酒を釀まるなり○下學集　崇德天皇保延二年天雨秬其色黑　古今主云宣帝元康四年長安雨黑黍粟○菓用ハ黑黍を入るゝと本艸ハ

宇流伎備　宇流ハ粳と稲と同しく粘あるを云大和本艸ハ宇流志伎備と稷らし粘あるを云〻

稲黍　本朝食鑑　小黍　大和本艸　眞稌　沖縄是糯黍ハ元色黑きもの也始く此ハ收て異を弘む

稷　本艸○通雅稷又本與粟通ア稷言肅也詩云既齊既稷亦肅意蓋秋氣也穀秋成曰稷百穀皆秋成故粟又為總名又云穄即稷呂覽陽山之穄筆談曰齊晉人謂即積皆曰祭乃土音也○寧波府志云稷穄糜穄一物而四名各因其俗為之名耳正字通穄稷同聲實一字○爾雅翼古言黍稷今謂黍穄穄即稷也

蕃名

黍稷

○こゝに者は粱粟を二ゝせるがゆへ天工開物云凡黍與稷同類粱與粟同類と是也又云黍有粘有不粘稷有粳無粘と然ゝと斯方黍は糯とし稷を粳とせるのゝ別ゝ一種の稷ゝ市ゝ但沖縄真稌の如き稽考ふべき事ゝ多くこの稷ゝ多ものは西地乃いみ一特ゝ此みゝ法ハ其物さゝ殆ら〻造酒造醴の法を以て其傳を失ひ代放代變遷乃弊音樂の我ゝ存して彼ゝ亡の類也按ゝ五行大義云稷亦是必非今之黄米而經傳所載稷黍今不可審又爾雅疏云粢也稷也正是一物而似二物故先儒甚疑焉天工開

物云至以稷米為先他穀熟堪供祭祀則當以早熟者為稷
則近之矣通志云稷似蘆而米可食其他と均適の説なく
して又爾雅翼に粱者黍稷之總名とも爾雅注ゟ江東人
呼粟為粱等ゟ至ては邦かゝて八糯粟の一種なる
ゟ迚し夫黍稷連称ゟの事尚書左傳の籍に出るし社
稷配享ゟ従来炳焉ゟ以て五穀之長とせ事なるゟ物
今審ゟ次第ゟ考ざゝ疑ふゝく且彼の五穀と云者麻
菽麦黍稷ゟ獨稲と遺ゟ前ゟ出やるゟ而ゟ粱
粟ゟ漏ゟ於て之何の解ふきゝと最疑ゟ堪し是稷ハ
粱粟の一種なるゟ未知ゟ考ざゝ也因ゟ田つくり

望ゟ稷てふゝの溶まきたれと其ゟと如ふ端ゟ作ら
ぬハ文舟乃楫ゟ忘ゟ事なるゟ日のくゝみゝゆきゝる神縄
人ゟ言ふゝしゟ彼国ゟても如ふ作ゝるものハ人ゟ
作ゝゟ只深掘玖島ゟ多ゟ作ゝゟ糯粟ゟ
甲伊信覚島ゟ作ゝ久ゟ作ゝゟ粳粟ハ者作ゝゟ
ゟ作ゝゟ糯ハ餅ゟ做て糯稲ゟ作ゝゟ粘
氣ゟ作ゝゟく或ハ槲葉ゟ八かゝ裏茅粽ゟ者調て香かくは
しく沙糖ゟんと振ゟ作ゝゟ作ゝゟ作ゝゟ
甲の茅ゟ作ゝゟ又さゝく作ゝゟ作ゝゟ
ゟ炊粥に煮て食作ゝゟ精粟ゟゟ味ゟ甘て久しゟ

似るゆゑともなう玄山北里の秀禾ちんぶとなれし是ま
ハ殆ひ行るへきあの二種ハその実も　大俵乃粟乃二
粒かけるどの左して地北濃ゆと金ちんぶ黄ちりと須
里ちるさて毛ゆくぶじてふ文字ハいろまやと四ふま
やりて筆ちりて共稌と書しりるそは稌の字地えちれ
ぬえちいへハ沖縄まハふるく国ゐ侍らものとのと
いらつてき共ほか二種乃粟ちも吾藩ま弱し上四ち城
おえれハ実に豪やうに其粒玉太くいろふも吾くふめ
とのまふ似氣ちく弱し迎ぶ乃稷の事とふ相ちひわ
げるひしわま擄言ちまかゝ籍に味識偏旁高談稷契と

ゆるまゆらちく稌の字ハ黍と右ちしるものやるる
とおちいゆるらゝてそちしられされハ真稌てふハ
吾　國の河まは黍のちるゆ沖縄まは粟の名と
かく称ちはその国ゝそのもの延喜大炊式ま稷と毛
知阿波と訓けゝ又和名鈔の稷米一名秫とせちあちも
當時ハちも唐と来往せちおちりてちる所ちしい
ふ屋ちゝと夫后稷の時天嘉穀と後ほといふもの即稷
ふして又炎農の世天粟と雨ほとある粟は古ま在て穀
禾の總称ちしま禮記ま稷を明粢といふる粢ハ餅とふ
ゆ屋ちとんてもれハ常の粟ハ髪脆て粢とふと屋ちゝ

蜀黍

以故ゆ今順鈔稷と糯黍とをるの穡ゆをるとひ且沖縄の真稌と引て志ばゝく之ゥ説つゝまゥ

高黍（メカビ）繰ふゝして長高く植（タイ）ゝゝて名ゝく

立黍（タイキビ）　穂黍（ホキビ）亦帛黍（ハクキビ）ゝも云ふ穂の帛ゆをれるをいてや　諸越黍（モロコシキビ）多識編亦唐黍と云

蜀黍齊民要術○博物志云種始自蜀故謂之蜀黍　蜀秫農政全書　蘆穄食物本艸　蘆粟以上廣雅　木稷　荻粱　蘆黍泉州府志　薯黍撫州府志　蘆稷品字箋○綱目時珍云蜀黍莖高丈許狀似蘆荻亦葉似蘆故ゆ蘆荻ゆ比ゝるの名ある耳

蕃名テユルクスコールニ

此ものゆ晩の二種あゥ苗をゥし瘠地ゆい宜ゝゝ

に暖氣乃肥しるを潤乃ふと好む二月苅てより苗丈六
寸の時畠乃遍環に移栽る勿し又畠のを作んと須付畠
ならしらく実植よりその時〳〵長さむ勿しも氣と怕ざ
るべかれよ五月雨乃頃潦水の溜へきまりて義やと
く淺き実と却て苗し八月に熟て殼黒く子赤く粒蝌眼に
似て毛密に伏り莖ハ藁に伏を延とも苗ハ帛に つく
除但中土以下に ハ栽へ〳〵 て 苗 枯 痩者多 晩
種せ○一種早きものハ微早く殼黄く子ハ黄ふ して淺赤
あり て粗大 ものも多く熟 と いて農家利 と ○凡種
るに ハ畠稲の種子と如 しくも 前て 四し一畝 植

乃熟 るを切 実 成 蒼し乾く収 し夫より二畝 之
番と 特 植 出 と ふかくの ふ 収 夫 ゆ 抜 て 利
得 り 勤 て 作 る 勿し ○食 ふ 実 と 春 て 殼 と さ り 餅 と
ふ〳〵 豆 し 又 磨 て 粉 と し 猛 水 に て 数 日 を さ〳〵 し 毒 反
ま り 餌 と し 煮 て 喫 い 或 又 酒 に 造 り て 黍 と ま〳〵 お
れ し 〳〵 皆 稲 粟 の 補 助 と な し 荒 歉 の 積 貯 に 備 ふ 勿し
○粉 と ふ し 湯 て 食 へ ハ 痢 と 泄 と な ふ 也

豆黍 此 も の 子 粒 大 豆 の 如 ち も は
珠黍 今 奥 州 及 北 陸 乃 称 中 ち も
編 多 識 唐 諸 越 本 朝 食 鑑 本 邦 俗 以 形 大 異 常 者 冠
外 國 之 名 而 呼 之 此 非 某 國 之 産 唐 黍

玉蜀黍

南蠻黍高麗黍之類是也　薩麻黍是甘藷南瓜のごとく其始て中國より殺やるをもてや木藩よりハ唐黍といふ今蜀黍を呼て唐黍とせるハ誤や蜀黍ハ本おのゝ〳〵斯邦一種の物あるしといふ　高麗黍

玉蜀黍　玉高粱以上綱目

譜　包子米盛京通志　鄉麥　御麥　戎菽　番麥以上羣芳

蕃名

此ものゝ二種あり或云舶來ものゝよて固蛮産ゝ係ものと

二月ゝ蔚種て七八月ゝ熟ぬ子の色ゝ紫赤と白黄ハ

紫赤なるハ黏ゝ黄白ハ孫ぞゝも炒折ゝもてゝハ紫赤

と佳ゝ（）けるもの苞ゝ頭鬚と出し粉ハ紅ゝ老てハ

赤黑ゝなるゝ粉ゝと嬰兒婦女と同て敷ふゝ形上已ハ

縷人ハ肉なきまゝ焙て食ふ又鍋ハ入爆炒ハ珠粒脹析て梅花あれあり又子と炒磨て沙糖ハ和て菓子とも成る或飯ハ炊き酒媒ハ混じへ或燒酎ハ造る味甘し豆二汁ありて微甜し○肥地に載き一根より苞実三五箇ともなる濟土ハハ二三苞出てを一苞のを登実て根ハ熟らを栽ハハ圃の湯宅の郭ハ植るつしを土力を拔て膏壌を殺かをとるもの○貯るハ苞皮を去りて熟玉へし年を越て換て苞ハのまゝ貯ハ拔て蝕ら○沙石淋痛きのひゞきハ此根葉を湯ハ煎し頻ハ用れハ驗あり○俗ハ此ものの根株ハ高鬚を附て節ハ

巳出れハ蕃年將ハ大風吹ふれぶるの兆といふ

成形圖說卷之十九終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan